Introduction to Case Study Special Issue—
Case Studies in Japan: Two Methods, Two Worldviews, Part 2
S. Iwakabe
Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, http://pcsp.libraries.rutgers.edu
Volume 11, Module 4, Article 1, pp. J-96 to J-106, 12-31-15 [copyright by author]

事例研究特集号——はじめに
日本における事例研究：2 つの方法，2 つの世界観 Part2

岩壁　茂 [a,b]

[a] お茶の水女子大学
[b] 連絡先：112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1　お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
Email: iwakabe.shigeru@ocha.ac.jp
謝辞：本号発行にあたり，広範囲にわたる翻訳を担当して下さった岩壁沙羅さん，緻密な編集作業を行い，翻訳を担当してくださった中村香理さん，論文の日本語訳作成に協力してくださったお茶の水女子大学の山崎和佳子さん，野田亜由美さん，髙畠靖菜さん，そしてこのプロジェクトを継続的にサポートして下さったダン・フィッシュマンさんに心より感謝いたします。

要約

本特集の目的は大きく異なる事例研究のスタイルを提示し，それらの方法的特徴を比較し，最終的にはそれぞれの強みを組み合わせた事例研究の方法を探究することであった。2 編の事例論文は，日本における臨床実践と事例研究の幅を実感できる内容であった。またそれに続く国内外からの 4 編のコメント，および事例論文著者の回答による対話が起こり，事例研究を通した臨床的学びの場を作り出した。その対話を通して，それぞれの事例研究の特徴がさらに浮かび上がってきた。ここでは，簡潔に 2 つの事例論文とコメントを振り返り，事例研究の方法論的課題，そして文化の問題について検討したい。

キーワード: 介入，事例研究方法論，事例研究を通した対話，文化，事例研究のエビデンス役割と教育的役割

背景

本号の PCSP は，PCSP6 月号に掲載された 2 つのケースに対するコメントと回答を掲載する。以下はもともとのシリーズのイントロダクションである。

> 日本は臨床，研究，そして心理療法の訓練における事例研究活用の中心的存在の一つである。本 PCSP 特集号では，その活動を歴史，社会，文化，認識論，臨床の豊かな文脈に置くため，日本の優れた心理学者で，本号の編集委員でもある岩壁茂氏による広範囲にわたるイントロダクションからスタートする。

また日本における事例研究の深さと広がりを捉えるため，岩壁氏のイントロダクションに続き，2つの注目すべき事例を紹介する。この2つは事例研究の方法論的連続性の二極を描く。村瀬嘉代子氏の事例は，主観性とナラティヴに焦点を当てる伝統的な事例を代表しており，武藤崇氏・三田村仰氏による事例は，ターゲットとなる症状の変化の量的詳細を客観的に追うことを目指した，科学的に厳密な一事例デザインを代表するものである。

日本の事例研究が概して焦点を当ててこなかった領域に，系統的かつ高い方法論的質を兼ね備えたアプローチを保証するための基準の創出がある。ここに提示された2つの事例研究は，そのような基準を体現し，事例研究がどのように提示されうるかのモデルとなることで，そうした基準を奨励するためにまとめられた。また今後のPCSPの特集号では，PCSPの通常のアプローチに沿い，基準の創出というゴールに向けて，日本における心理療法の事例研究の性質と役割に関する広範な議論とともに，各事例に対する日本人と日本人以外の著名な臨床心理士からのコメントを掲載する。そして次々号では各コメントに対する原著者からの回答も掲載する。

日本語と英語の両方の読者に届けるため，本号のPCSPは英語と日本語の両方で論文を掲載する。

以下，３つの論文の英語版と日本語版へのリンクである：

PCSP Vol 11, No. 2 (2015). 英語版目次

Introduction to Case Study Special Issue-- Case Studies in Japan: Two Methods, Two Worldviews
*** Shigeru Iwakabe
http://dx.doi.org/10.14713/pcsp.v11i2.1902

The Art of Communication Through Drawing: The Case of "Mr. R," a Young Man Professing Misanthropy While Longing for Connection With Others
*** Kayoko Murase
http://dx.doi.org/10.14713/pcsp.v11i2.1903

Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, http://pcsp.libraries.rutgers.edu
Volume 11, Module 4, Article 1, pp. J-96 to J-106, 12-31-15 [copyright by author]

Acceptance and Commitment Therapy for "Taro," a Japanese Client with Chronic Depression: A Replicated Treatment-Evaluation

*** Takashi Muto & Takashi Mitamura

http://dx.doi.org/10.14713/pcsp.v11i2.1904

PCSP Vol 11, No. 2 (2015). 日本版目次

事例研究特集号—はじめに 日本における事例研究：2 つの方法，2 つの世界観
Iwakabe 岩壁　茂
http://dx.doi.org/10.14713/pcsp.v11i2.1906

描画を通したコミュニケーション： 人間不信を標榜しながらも， 他者とのつながりを希求する青年 R 氏の事例
Murase 村瀬　嘉代子
http://dx.doi.org/10.14713/pcsp.v11i2.1907

慢性化したうつを抱えた日本人クライエント「太郎」に対する アクセプタンス＆コミットメント・セラピー： トリートメント評価による再現可能性検証
Muto 武藤　崇，Mitamura 三田村　仰
http://dx.doi.org/10.14713/pcsp.v11i2.1908

****

PCSP の本特集号では，村瀬氏と武藤・三田村氏の事例研究に対し，2 人の英語文化系のコメンテーターと 2 人の日本人のコメンテーターによるコメントを掲載する。村瀬氏の事例へのコメントは，スコットランドのジョン・マクレオッド氏と日本の熊野宏昭氏が，武藤・三田村氏の事例へは，アメリカ合衆国のスティーヴン・ヘイズ氏と日本の金沢吉展氏がコメントを寄せた。コメントの観点にバラエティを加えるため，マクレオッド氏とヘイズ氏は，それぞれ対象となる事例と同じ理論的オリエンテーションからコメントする一方，熊野氏と金沢氏は異なる理論的オリエンテーションからのコメントを寄せた。

アクションエディターからのこのシリーズへの振り返り

Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, http://pcsp.libraries.rutgers.edu
Volume 11, Module 4, Article 1, pp. J-96 to J-106, 12-31-15 [copyright by author]

介入と原則

武藤・三田村（2015）と村瀬（2015）の事例研究法を評するに先立ち，両者の介入に対する異なる見方を整理する必要がある。武藤・三田村の論文では，うつのクライエントに対する ACT の効果を検討することを目的としており，介入マニュアルにそって介入を実行することに重きがおかれ，トリートメント整合性と忠実性を高めることによって臨床的再現可能性を確保することが求められた。ここには，効果をもつのは，セラピストという人の存在よりも，介入の手続きを正確にしかも適切に遂行できることにあるという前提がある。そのためかセラピストの主観は排除され，セラピストの内的プロセスにはあまり触れることがなく介入法が実施されるプロセスが中心に描かれている。Hayes（2015）は，ACT が文脈を重視したセラピーであることをコメントで言及している。ACT における文脈は，介入の背景としての文脈という意味合いが強い。

もう一方で，村瀬（2015）のアプローチは，明確な手続きや手法にそって介入が行われるのではなく，基本的原則にそってクライエントが必要とするかかわりを組み立てていくよりオープンでプロセス指向的である。これは，共通因子アプローチにもっとも似ている。基本原則を一人のクライエントの特徴に合わせて使うために，セラピストの臨床判断，そしてセラピストの「人」が大きくかかわる。そのためか，心理療法プロセスの記述は外的な出来事だけでなく，セラピストの主観的体験や判断のプロセスも重要な一部となる。また，ここでは「介入」よりも治療関係，セラピストの姿勢と介入の明確な区別がない。変数として切り離すことができないような生活状況にも目を向ける村瀬のアプローチでは，介入と文脈という区別も不明確であり，縫い目がないようにつながれている。セラピストは，介入を実施する一つの変数ではなく，介入の一部となっている。このように，この二つのとらえ方は，心理療法における介入，治療関係，セラピストのかかわり，をどのように捉えるのかという視点の異なりを反映している。

事例研究法

武藤・三田村（2015）の論文は，McLeod（2010）の成果指向の事例研究にもっとも近い。数多くのアウトカム指標を用いて，毎回の面接ごとにその結果を示している。心理療法全体に効果があったのかという全体的な変化の有無を示すだけでなく，どの介入が導入されたときにどのような変化があったのか，というように具体的な介入とその効果がひもづけされている。もう一方で村瀬の論文は，セラピストが自身の視点からセラピーにおける体験について語るナラティブ事例研究と言える。読者は，瞬時ごとに繰り広げられる生きた心理療法体験へと招待される。量的なデータはない

が，クライエントが描いたいくつもの絵が提示され，そこに見られる変化はその描画を見る者に直接体験されるような形で伝わってくる。描画にみられる変化を測定するために一定の基準を設けて評定者間の合意をとり，量的な信頼性を求めることも可能かもしれない。しかし，描画が伝えるものを十分に活かすことにはならないだろう。また，村瀬は，効果の指標として妹や家族との接触から得られた情報を挙げ，具体的にどんな介入に効果があったのかというよりも全体的な変化と適応に関する情報のみを提示しており，効果ということに関してかなり異なる見方をもっている。

事例研究のエビデンス役割と教育的役割

Mackrill と Iwakabe（2013）は，事例研究のエビデンスとしての役割と教育的役割について論じた。エビデンスとしての役割とは，ある特定の介入方法の効果を示す機能であり，もう一方，教育的役割とは事例論文を読むこと執筆すること，それについて話し合うことから得られる効果を指す。武藤・三田村および村瀬の事例論文はこれらの機能において大きな違いがあった。まず，エビデンスとしての役割であるが，武藤・三田村の論文ではこの点が明確に示されており，この論文が ACT のうつに対する介入のエビデンスとなっている。もう一方で，村瀬の論文には，教育的役割が顕著である。村瀬の論文に対するコメントを担当した熊野（2015）と McLeod（2015）も経験豊富な臨床家であるが，それぞれ自分の限界を試され，論文を細部まで読みその意味について考えるような要請を受けたように感じていた。この事例論文は，情報を与える媒体であるだけではなく，セラピストとしての自己に呼びかけ，そのかかわりを引き出す動因となっている。Hayes（2015）は，これを読者が，深い理解という体験に招待されると表現している。また，McLeod は，読者の学習を促進する役割が強いことを指摘している。このような対話生成の機能は，ナラティブ事例研究がもつ教育機能の一つであり，介入それ自体の効果についての議論よりも，セラピストの個人的かかわりと読者のかかわりによって成り立っている。

しかし，このセラピストの深いかかわりは実際のところエビデンスと無縁ではない。Kim, Wampold, & Bolt（2006）によるとうつに対する認知行動療法（Elkin, 1994）と対人関係療法の比較の効果研究では，介入による効果の差は認められなかった。しかし，セラピストの効果は，効果を示す分散の 1%から 12%を説明していた。薬物治療の効果においても薬の違いよりも，治療者の効果が高いというメタ分析の結果もある（McKay, Imel, & Wampold, 2006）。Wampold は，これらの知見から効果的なセラピストの特徴として，対人的知覚，情動の調整と表現力，あたたかさと受容，共感，他者への焦点化，などの対人スキルを上げている（2012）。反省的実践は，コンピテンシーモデルに基づく臨床訓練の中心にあり，つまり，クライエント一人一人の特徴と治療的文脈を配慮

し，セラピスト自身における心理的プロセスを記述したセラピストの学習と成長に焦点化したナラティブ事例研究は，多くの側面において決して非科学的で古い遺物ではない。

英国医療研究所はエビデンスに基づく医療を「患者の特徴，文化，選好の文脈において入手可能な研究知見と臨床的専門性を統合する」と定義する（Sackett, Straus, Richardson, Rosenberg, & Haynes, 2000, p. 147）。APA の心理学におけるエビデンス実践の特別委員会（APA Task Force on Evidence-based practice in psychology, 2006）によるエビデンスに基づいた実践とは，「心理学的アセスメント，ケースフォーミュレーション，治療関係，介入の実証的に支持された原則を応用することによって，効果的な心理学実践を促進し，公共衛生を高めること（p.273）」と定義されている。これは，クライエント個人を中心にアセスメント，ケースフォーミュレーションを行い，治療関係や介入のあり方を調整することを意味している。この点において武藤・三田村も村瀬もバランスの差はあれ，決してエビデンスに基づく実践から離れているわけではない。

日本では，ナラティブ事例研究が一般的である。量的な指標が使われず，介入に関しても臨床家の判断に任され，どのような介入が行われたのか分からないことが多い。そのようななかで，武藤・三田村（2015）のような系統的事例研究は，今後日本におけるエビデンスの基礎を作るために必要であり，その要素を少しでも取り込んでいけることが重要である。もう一方で村瀬の事例論文（2015）は，ナラティブ事例研究であるが，このように生き生きと臨場感溢れる記述ができるようになるには臨床的な力やそれを振り返り統合する力だけでなく，それを伝えるコミュニケーション力も必要とされるだろう。そして自分自身の中に起こる心理的変化を振り返ること，さらにはそのような内的プロセスを開示するオープンさも求められる。それらは，内省的実践の基礎となり，心理療法の実証研究から得られた知見を反映している。しかし，ナラティブ事例研究の教育的価値に関して十分なデータや基準があるとは言い難い。もし，今回の特集では村瀬という経験豊富な臨床家が振り返っているが，より経験が浅い場合，これほどまでに深いかかわりをコメンテーターから得ることができただろうか。事例の選択も重要な点である。村瀬は極めて特徴的な事例を選んだ。しかし，変化の大きさも速度もあまり目立たない場合もある。発見志向的に役立つ事例研究は，必ずしも一般的にその心理療法の効果に関する指標としてあまり適切ではないだろう。教育効果を高める事例研究の特質については今後検討が必要である。

文化

村瀬と武藤・三田村の論文は，文化という問題をどう扱うのかという点においても対照的であった。武藤は，ポストモダンの作家である村上春樹を引用し，日本らしさを強調する作家と村上春樹

および自らの立場の違いを示している。もう一方で，漢字を例に使ってマインドフルネスの概念を説明したり，茶道の儀式をアレンジした技法を用いたり，東洋や日本的な文化的慣習や知識を意識的に導入していた。ACT のマインドフルネスという考えはもともと仏教に由来し，東洋的な意味合いが強く，論理性や合理性を強調する認知療法とは一線を画する。ACT が行動療法の中で，文脈を重視するという点で突出しているのも，日本において ACT が親和性をもって受け入れられていることと無関係ではないだろう。

武藤（2015）は，コメントに対する回答として村上春樹の日本文学への心情を自らの気持ちを表すために引用している。そこでは日本らしさを強調するのではなく，そのような部分を排除しても残ってくる部分がそこにあるという意見であった。日本の臨床心理学の中心的人物の中には，日本における臨床心理学の発展の特異性を強調するものもいる。科学的研究に基づいた上での実践を強調する西洋において発展してきた臨床心理学ではなく，日本における実践から直接的に導かれる実践の学であることを強調する心理臨床学という用語まで作られている。そしてその中で「日本独自」の実践のあり方について論じられることが多い。ここに日本の文化の特異性を強調した文化的研究でありながら，ナショナリズムの要素が極めて強い日本人論が，無批判のまま奨励されているような気風も感じられる（Dale, 1987）。この点に関して，評者も武藤と同様の危機感や疑問を感じる。

そのような中で，客観性を求め，明確な形で文化を美化したり，強調することを避けようとする武藤・三田村の努力は日本の臨床心理学の制度化された文化に新しい風を吹き込む試みとも言える。それは，日本の臨床心理学における制度化された文化というべきかもしれない。強い拘束力をもっている。もう一方で，そのような試みは，文化に関わらず起こっている人と人のやりとりを必要以上に排除してしまう可能性もある。金沢（2015）による感情や関係性の記述を求めるコメントは，プロセス研究の知見からの指摘であり，日本的な調整を求める声ではないだろう。何を文化とするのか，何を体験しようとするのか，ということは客観性だけでなく，セラピスト自身の選択する判断にも大きく影響を受けているようである。

もう一方で，村瀬の論文は，すみずみまで日本的な感覚が流れているように感じられる。彼女の文体には科学的論文の固さがなく，平易でありながら，時に複雑な概念や考えがさらりと語られる。セラピストとクライエントのやりとり，間接的な表現を直接的な表現と同じくらい重視する，などである。村瀬の統合アプローチは，彼女がふれてきた数多くの欧米のアプローチの影響もあるが，彼女が日本における臨床活動から考案したいわば土着的なアプローチと言える。しかし，クライエントの潜在的力を見いだし，セラピストが自然にしかも一人の人間としてクライエントと向き合い，

言葉にできる気持ちを言葉にすることを促進する点は，極めてヒューマニスティックアプローチに近い。

そして，文化という場合，日本に限定されない普遍的とは言わなくても，より広い何かを感じさせる要素もある。歴史や時代を超えた人物の肖像画とシンボル，官僚の父親，しかも防衛庁に勤務する，そしてそのような外向きの家族の姿と家庭の内部に起こる問題の狭間にいる母親，ここに言葉で明確に書かれていること以上に読者に伝わってくる雰囲気・空気がそこにある。村瀬も制度としての文化は，意識していると思われる。学派による対立が明確ななか，自ら統合的な立場をとり，学派を超えてクライエントを理解しようと主張することは，臨床心理学の文化において明確な立場をとっている。また，客観性のみを重視するのではなく，常にそれと共感のバランスを考えるなど，異なる考えや立場の中に常に均衡を求める姿勢は，一つの学派や立場に肩入れし，安住することに対する明確な立場でもある。これらの内的緊張はナラティブの一要素でもある。もう一方で，このようなバランスをはかることが，基本的原則をもとにクライエントに合ったセラピーを作っていくなかで重要な姿勢なのであろう。

もう一方で，村瀬において客観性が強調されている。また事実を述べることも重視されている。しかし，それは，武藤・三田村が求めるような方法的な客観性ではない。クライエントを見定める目としての客観性であるがそれは常にクライエントを理解する共感と背中合わせになっている。自宅に呼ぶこと，両親と話すこと，夫を通しての紹介など，村瀬本人の心理学とのかかわりの人としての存在が，明確に押し出されている。そこには，セラピストの一種の純粋性の表れであり，クライエントにとって一人の人間として現前するセラピストを見せているようでもある。また，事実を述べることを重視するが事実とはセラピストが観察したことであり，それらは出来事，セラピストの観察，内的体験とさまざまな水準の客観性がある。これらの事例研究に表される文化は，人々がどのように生き，そして心理療法を体験するのかということだけでなく，セラピストがある心理学のコミュニティの中でどのように心理療法を実践し，自身が行っていることをどのように表すのかということにもかかわっている。ひるがえって，客観性は，観察の科学的基準と正確さの問題だけではなく，ある文化において個人がはっきりとまたは暗にとる政治的立場でもある。

最後に，事例論文を寄稿してくださった 3 人の著者と 4 人のコメンテーターに，この対話に参加してくださったことに感謝を表したい。翻訳を通して文化を越えてのコメントにもかかわらず，コメンテーターの理解の正確さと深さに驚きを覚えた。エビデンスに基づいた実践とグローバルメンタルヘルスが重要な課題となるメンタルヘルス領域において，本特集が，事例研究とそれについて

の対話が，心理療法が特定の文化において，また文化を越えて効果的になる要因についての理解に貢献する潜在性を示すことに寄与できたことを願う。

文献

APA Presidential Task Force on Evidence-Based Practice. (2006). Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist, 61,* 271-285.

Dale, P. (1987). *Myths of Japanese uniqueness.* New York: Routledge.

Elkin, I. (1994). The NIMH Treatment of Depression Collaborative Research Program: Where we began and where we are . *In A. E. Bergin, & S. L. Garfield (Eds.), Handbook of psychotherapy and behavior change (4th ed.). (pp. 114-139).* Oxford, England: John Wiley & Sons.

Hansen, B.P., Lambert. M.J., & Vlass, E.N. (2015). Sudden Gains and sudden losses in the clients of a "supershrink": 10 case studies. Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11(3), Article 1, 154-201. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Hayes, S. C. (2015). Examining the ACT model in a case study. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, *11*(4), Article 5, 272-278. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Kanazawa, Y. (2015). The role of context in the case of Taro. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11*(4), Article 6, 279-284. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Kim, D. M., Wampold, B. E., & Bolt, D. M. (2006). Therapist effects in psychotherapy: A random effects modeling of the NIMH TDCRP data. *Psychotherapy Research, 16,* 161-172.

Kumano, H. (2015). Discontinuous change facilitated by emotional expression through drawing and the accurate verbal responsiveness of the therapist. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11*(4), Article 3, 255-263. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Mackrill, T., & Iwakabe, S. (2013). Making a case for case studies in psychotherapy training: A small step towards establishing an empirical basis for psychotherapy training. *Counselling Psychology Quarterly, 26,* 3-4, 250-266.

McKay, K. M., Imel, Z. E., & Wampold, B. E. (2006). Psychiatrist effects in the psychopharmacological treatment of depression. *Journal of Affective Disorders, 16,* 236-242.

McLeod, J. (2010). *Case study research in counselling and psychotherapy*. London: Sage.

McLeod, J. (2015). Narrative case studies and practice-based learning: Reflections on the case of "Mr. R." *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11* (4), Article 2, 239-254. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Murase, K. (2015). The art of communication through drawing: The case of "Mr. R," a young man professing misanthropy while longing for connection with others. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11*(2), Article 2, pp. 81-116. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Muto, T. (2015). Acceptance and Commitment Therapy is "Murakami Haruki". *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11* (4), Article 7, 285-287. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Muto, T., & Mitamura, T. (2015). Acceptance and Commitment Therapy for "Taro," a Japanese client with chronic depression: A replicated treatment-evaluation. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 11*(2), Article 3, 117-153. Available: http://pcsp.libraries.rutgers.edu

Sackett, D. L., Straus, S. E., Richardson, W. S., Rosenberg, W., & Haynes, R. B. (2000). *Evidence based medicine: How to practice and teach EBM* (2nd ed.). London: Churchill Livingstone.

Wampold, B. E. (2012). *Qualities and actions of effective therapists: Research suggests that certain psychotherapist characteristics are key to successful treatment.* American Psychological Association Education Directorate.